Osaka Shoin Women's University Repository

朝敵か将軍か
―『太平記』巻十四後半部について―

谷垣伊太雄

一

「君ノ厚恩」を口にして挙兵を拒絶していた足利尊氏も、弟の直義が「綸旨」(注1)(実は上杉重能が書いたもの)を見せて説得したことによって、「一門ノ浮沈、此時ニテ候ケル。サラバ無レ力」(注2)と挙兵を決意した。

こうして、形の上では「朝敵」となった尊氏と、「官軍」の新田義貞とが対決するのが、『太平記』巻十四前半部(一「新田足利確執奏状事」、二「節度使下向事」、三「矢矧鷺坂手超河原闘事」、四「箱根竹下合戦事」、五「官軍引退箱根事」)である。

箱根・竹下合戦で、足利軍に圧倒された官軍は、尾張国まで退くこととなるが、第五章では、むしろ官軍側の篠塚・栗生・名張らの勇猛な活躍が目立つ。しかし、それにも拘らず「昨日マデ二萬餘騎有ツル勢、十方へ落失テ十分ガ一モナカリケリ」という現実の前では、「皇居ノ事オボツカナク候ヘバ、サノミ都遠キ所ノ長居ハ然ルベシ共存候ハズ」とする大将達の意見に、義貞としても同意せざるをえなかった。

巻十四後半部の章立ては次の通りである。

六、諸國朝敵蜂起事
七、將軍御進發大渡山崎等合戰事
八、主上都落事付勅使河原自害事
九、長年歸洛事付内裏炎上事
十、將軍入洛事付親光討死事
十一、坂本御皇居幷御願書事

第六章冒頭の「カヽル處ニ」というのは、第五章の状況を総括した上での官軍側に立っての叙述の始まりということになる。

Ⓐ「十二月十日」、讃岐より高松頼重の早馬が到着。「去月二十六

Osaka Shoin Women's University Repository

日」に挙兵した「足利ノ一族細川卿律師定禪」が三千余騎となって京都に攻め上ろうとしているため「御用心有ベシ」というものであった。これに対して、京都側は「新田越後守義顯ヲ大將トシテ、結城・名和・楠木以下宗トノ大名共大勢ニテ有シカバ」「何程ノ事カ有ルベキト、サマデノ仰天モナカ」ったが、Ⓑ「同十一日」、備前の児島高徳より早馬が到着し、「去月二十六日」に佐々木信胤・田井信高らが細川定禪の誘いを受けて備前で挙兵し、「其翌日」には「小坂・川村・庄・眞壁・陶山・成合・那須・市川以下、悉ク朝敵ニ馳加」わり、「同二十八日」には福山に押し寄せ、児島一族らが応戦する中で「野心ノ國人等、忽ニ翻テ御方ヲ射」たため、備前に退き、守護の松田盛朝らの加勢を得て合戦をしたものの、その松田が敵になったため「官軍數十人討レテ、熊山ノ城ニ引籠」った、すると「其夜」、内藤弥二郎が「御方ノ陣ニ有ナガラ、潛ニ敵ヲ城中ヘ引入」れたため、「諸卒悉行方ヲ知ラズ没落」してしまい、何とか死を免れた高徳の一族らが「身ヲ山林に隠シ、討手ノ下向」を待っているために「若早速ニ御勢ヲ下サレズバ、西國ノ亂、御大事ニ及ブベシ」という、要請を含む長い報告であった。

このⒶⒷの早馬が「天聽ヲ驚シ」、「コハ如何スベキト周章」しているところへ、Ⓒ「又翌日ノ午剋」に、丹波の碓井盛景より早馬が到着。久下時重らが守護館を攻撃し、防戦したものの敗れて摂津へ退いたこと、赤松円心は「野心ヲ挾ム歟、返答ニモ及バズ」、むしろ「將軍ノ御教書ト號シ、國中ノ勢ヲ相催ス」との噂さえあること、「但馬・丹後・丹波ノ朝敵等」が、備前・備中の勢と同時に、山陰道・山陽道より攻め上るとのことなので「御用心有ルベシ」との報告であった。

Ⓓ「又其日ノ酉剋ニ」能登国石動山の衆徒よりの使者が到着。「去月二十七日」に越中守護普門利清達が「將軍ノ御教書ヲ以テ、兩國ノ勢ヲ集メ、叛逆ヲ企」て、石動山に立籠った国司中院定清は戦死し、寺院は全焼したこと、「是ヨリ逆徒彌猛威ヲ振テ、近日已ニ京都ニ責上ラン」としているため急いで「御勢」を派遣してほしいというものであった。

「是ノミナラズ」、Ⓔ加賀・越前・伊予・長門・安芸・周防・備後・出雲・伯耆・因幡、その他「五畿・七道・四國・九州」まで「殘所ナク起ル」との報が伝わってきた。そのため、「主上ヲ始メマイラセテ、公家被官ノ人々」は「獨トシテ肝ヲ消サズト云事」がなかった。

この結果、尾張にいる新田義貞に「上洛スベシ」と伝える勅使として、「引他九郎」が派遣される。引他は「龍馬ヲ給テ」十二月十九日の「辰刻」に京都を出立し、「午刻」には「近江國愛智川ノ宿」に着いたが、龍馬が急死したため、馬を次々に乗替えて尾張に到着した。報告を受けた新田義貞は「先京都へ引返シテ宇治・勢多ヲ支テコソ、合戰ヲ致サメ」として、勅使とともに上洛した。

ところで、この勅使派遣記事の前には、Ⓔに続いて「其比何カナル嗚呼ノ者カシタリケン。内裏ノ陽明門ノ扉ニ、一首ノ狂歌ヲゾ書タリケル。賢王ノ横言ニ成ル世中ハ上ヲ下ヘゾ歸シタリケル」との記述がある。Ⓐ〜Ⓓの朝敵峰起詳細情報の次に、Ⓔで情報が空間的

Osaka Shoin Women's University Repository

に拡張され、京都（朝廷側）の動揺が描かれるが、狂歌記事は、この第六章が「朝敵蜂起」を描きつつも、「敵」を批判的に叙述するのではなく、「朝」の方に胚胎する峰起要因を暗示し、次の勅使の龍馬急死の「不思議」へと結びついていく。

第七章は、建武三年（一三三六）年頭について、「去程ニ改年立歸レ共、内裏ニハ朝拜モナシ。節會モ行レズ」という静的異常さと、「京白川ニハ、家ヲコボチテ堀ニ入レ、財寶ヲ積デ持運ブ」という「物騒グ見ヘ」る異常さとの叙述で始まる。そして、「將軍已ニ八十萬騎ニテ美濃・尾張ヘ著給ヌ」を初めとして、「四國ノ御敵」の接近、「山陰道ノ朝敵」の大江山越え等の情報の交錯によって、「召ニ應ジテ上リ集タル國々の軍勢共」が逃走したため、洛中に残るのは「勇ル氣色」もない「一萬騎マデモアラジ」と思われる軍勢であった。

そこで、「軍勢ノ心ヲ勇マセン爲」に、「今度ノ合戦ニ於テ忠アラン者ニハ、不日ニ恩賞行ハルベシ」と決断所に壁書が貼り出された。ところが、その壁書の末尾には「カク計タラサセ給フ綸言ノ汗ノ如クニナドナカルラン」という「例ノ落書」（傍点筆者。以下同じ）が記された。

正月七日、新田義貞が内裏より退出して軍勢の手分けをした。①勢多（瀬田）へは名和長年勢二千騎、②宇治へは楠木正成勢五千余騎、③山崎へは脇屋義助を大将として、洞院公泰・文観僧正ら七千余騎、④大渡へは新田義貞を総大将とする一万余騎、という派遣となった（前記の「一萬騎マデモアラジ」と齟齬するが）。いずれも、川に乱杭を打ったり、橋板を引落としたりして、敵の攻撃を防ごうとしたが、②では「敵ニ心安ク陣ヲ取セジ」として建物を焼払ったところ、平等院の仏閣・宝蔵までも焼失してしまった事が「淺猿ケレ」と記され、③では「寶寺ヨリ川端マデ屏ヲ塗リ堀ヲホリテ、高櫓・出櫓三百餘箇所ニカキ雙ベ」たものの、「此陣ノ軍ハカ〻〳〵シカラジトゾ見ヘタリケル」と記される。

一方、将軍（尊氏）は「八十萬騎」を率いて、正月七日に近江国伊岐洲社に立籠る山法師三百余騎を撃破し、八日に石清水八幡宮の山麓に陣取った。細川定禅は、四国・西国勢を率いて、正月七日に播磨国大蔵谷（明石）に到着、京都より逃げ下ってきた赤松範資と出会い、「元弘ノ佳例」として範資を先陣とする二万三千余騎で、八日午刻に摂津国の芥川に陣取った。丹波の久下・波々伯部・酒井らは、但馬・丹後勢と合流した六千余騎にて、西山の峯の堂に立籠る二条師基を追落とし、大江山の峠に篝火を焚いた。

京都側は「時ニ取テ弱カラン方ヘ向ベシ」として、江田行義を大将とする三千余騎が正月八日暁に大江山へ押し寄せて丹波勢を撃破した。

正月九日辰刻、大渡の西の橋詰に押し寄せた尊氏勢は、渡河の方法を思案して「時移ルマデ」控えていた。すると、官軍側から「ハヤリヲノ者共ト見ヘタル兵百騎計」が川端に出て、丹波勢の敗北を告げるとともに、治承・元暦の宇治川合戦の先例を引いて「聲々ニ欺テ、箙ヲ敲テ咄ト笑」った。そのため、武蔵・相模の兵二千余騎

Osaka Shoin Women's University Repository

が馬で川に乗り入れようとしたが、執事の高師直が制して「在家ヲコボチテ、筏ニ組デ渡」るように命じたので、兵達もそれに従った。しかし、筏で渡ろうとした武蔵・相模の五百余人は、川中の乱杭などのために動きがとれなくなったところを矢の攻撃を受け、筏も壊れ「皆水ニ溺レテ」しまった。

その後、橋上の櫓にいた官軍側の武士が、やはり治承の宇治川合戦の例を引きつつ「只、橋ノ上ヲ渡テ手攻ノ軍ニ我等ガ手ナミノ程ヲ御覽ジ候ヘ」と「敵ヲ欺キ恥シメテアザ咲」った。これを聞いた師直陣の「大力ノ早業、打物取テ名ヲ知ラレタル」野木頼玄という武士が、「數萬騎ノ敵御方立合テ見ケル」中を、矢を掻いくぐりながら橋桁を渡り、敵陣の櫓を倒そうとしたため、櫓上の射手四五十人は、二の木戸内へ逃げ込んだ。それを見て、「スハヤ敵ハ引ゾ」と、「參河・遠江・美濃・尾張ノハヤリ雄ノ兵共千餘人」が「我前ニトセキ合テ」渡ろうとした。ところが、橋桁四五間が折れ、川中に落ち流された兵達は爆笑されてしまった。その中、「水練サヘ達者」であった野木頼玄だけは、「橋ノ板一枚ニ乗リ、長刀ヲ棹ニ指テ」帰陣した。

足利勢が攻めあぐむ中、赤松貞範のもとに兄範資の自筆書状が届いた。それには、細川定禅とともに「今日巳芥河ノ宿ニ著候也。翌日十日辰剋ニハ、山崎ノ陣ヘ推寄テ、合戦ヲ致スベキニテ候。此由ヲ又將軍ヘ申サシメ給フベシ」と書かれており、報告を受けた足利勢は、大いに喜び合った。

予定通り細川定禅は二万余騎で桜井宿の東に出兵した。川沿いに二千余騎で出陣した赤松範資の旗紋を見て、赤松貞範は小舟三艘に乗って渡河し、兄弟は涙の再会を果たした。

こうして始まった「山崎ノ合戦」は、降人が続出する中、「討殘サレタル官軍三千餘騎」が退却、さらに「敵皇居に亂入リヌト覺ルゾ。主上ヲ先山門ヘ行幸成奉テコソ、心安合戦ヲモセメ」と考えた新田義貞も義助とともに都に戻ろうとした。それを追撃する細川定禅軍を、義貞達の入京を助けるために、後陣の新田義顕は、必死の奮戦によって防ぎつつ、「鎧ノ袖モ冑ノシコロモ、皆切落サレテ、深手アマタ所負」い、「半死半生ニ切成サレテ、僅ニ都ヘ歸」った。

第八章・九章は京都側の動きを描く。「山崎・大渡ノ陣破レヌ」との報に、「京中ノ貴賤上下」は「周章フタメキ倒レ迷」い、車馬が「東西ニ馳違」って「藏物・財寶ヲ上下ヘ持運」んだ。

後醍醐天皇は「三種ノ神器ヲ玉體ニソヘテ、鳳輦ニ召サレ」たものの、駕輿丁が一人もいなかったため、「四門ヲ堅テ候武士共」が「鎧著ナガラ徒立ニ成テ」供奉した。牛車を急がせて御所に着いた吉田内大臣定房が「御所中ヲ走廻テ見」たところ「近侍ノ人々モ周章タリケリト覺テ、明星・日ノ札・二間ノ御本尊マデ、皆捨置カレ」ていたので、「心閑ニ青侍共ニ執持セ」た。ところが、この場面でも「如何カシテ見落シ給ヒケン、玄象・牧馬・達磨ノ御袈裟・毘須羯摩ガ作シ五大尊、取落サレケルコソ淺猿シケレ」と記される。やがて、新田義貞・義助ら「二萬餘騎」が「鳳輦ノ跡ヲ守禦シテ」東坂本へ向かった。

Osaka Shoin Women's University Repository

その中、「大渡ノ手」に向かった信濃国の住人勅使川原丹三郎は、官軍の敗北・主上の都落ちを知り、「我何ノ顔有テカ、亡朝ノ臣トシテ、不義ノ逆臣ニ順ハンヤ」と、父子三騎で三条河原から引返し、「鳥羽ノ造路・羅精門ノ邊ニテ、腹カキ切テ」死んだ。

第九章。瀬田を守護していた名和長年は、「山崎ノ陣破レテ、主上早東坂本ヘ落サセ給ヌ」と聞き、「是ヨリ直ニ坂本ヘ馳參ランズル事ハ安ケレ共、今一度内裏ヘ馳マイラデ直ニ落行ンズル事ハ、後難アルベシ」と考え、三百余騎で「十日ノ暮程ニ」帰京した。そして「十七度マデ戰」って百騎ばかりになった長年は、「内裏ノ置石ノ邊ニテ、馬ヨリヲリ冑ヲ脱ギ、南庭ニ跪」き、荒廃した内裏に落涙した後、東坂本へと向かった。

その後、「四國・西國ノ兵共」が洛中に乱入し火を放ったため、「猛火内裏ニ懸テ、前殿后宮・諸司八省・三十六殿十二門、大廈ノ構ヘ、徒ニ一時ノ灰燼ト成」ってしまった。

正月十一日の「將軍八十萬騎」の入京が記されるのが第十章。そして、後醍醐天皇から「貳ロナキ者也ト深ク憑マレ進セテ、朝恩ニ誇ル事傍ニ人ナキガ如」きであった結城親光は、「此世ノ中、トテモ今ハ墓々シカラジ」と思い、「イカニモシテ將軍ヲネライ奉ラン爲ニ、態ト都ニ落止」まった。親光が禅僧を介して尊氏に降參を申し入れたところ、尊氏は「誠ノ降參ニテハアラジ、只尊氏ヲタバカラン爲ニテゾアルラン。乍ら去事ノ様ヲ聞カン」として、大友貞載を送った。ところが「元來少シ思慮ナキ者」であった貞載が親光に向かって「降人ノ法ニテ候ヘバ、御物具ヲ解セ給ヒ候ベシ」と「アラ、カニ」告げたため、親光は「サテハ將軍ハヤ我心中ヲ推量有テ、打手ノ使ニ大友ヲ出サレタリ」と判断して、「三尺八寸ノ太刀ヲ振テ」貞載に斬り付けた。貞載が太刀を抜けぬまま落馬して死んだのを見た「大友ガ若黨三百餘騎」は、「結城ガ手ノ者十七騎ヲ中ニ取籠テ」斬りかかり、「一所ニテ十四人マデ」討たれてしまった。

第十一章。東坂本に臨幸した後醍醐天皇は「大宮ノ彼岸所」を御座所としたものの、山門の大衆が一人も参向しないため、「サテハ衆徒ノ心モ變ジヌルニヤト叡慮ヲ惱サレ」ていた。そこに参上した藤本房英憲僧都が「申出タル言モナク泪ヲ流シテ大床ノ上ニ畏テ」いるのを御簾越しに見た帝は、「自宸筆ヲ染ラレテ御願書ヲアソバサレ」て、「是ヲ大宮ノ神殿ニ籠ヨト仰セ下サレ」たので、英憲はそれに随った。

暫くして、円宗院法印定宗が「同宿五百餘人」を連れて参上したところ、帝は「大ニ叡感有テ」定宗を「大床ニ召」れた。定宗は伝教大師の開基以来の山門の存在意義を語り「今逆臣朝廷ヲ危メントスルニ依テ、忝モ萬乘ノ聖主、吾山ヲ御憑アッテ、臨幸成テ候ハンズルヲ、褊シ申ス衆ハ、一人モアルマジキニテ候。身不肖ニ候ヘ共、定宗一人忠貞ヲ存ズル程ナラバ、三千ノ衆徒、貳ロハアラジト思食シ候ベシ」と述べて、官軍の宿泊の手配をした。

その後、南岸坊僧都の道場坊祐覚が「同宿千餘人」を連れて参向し、大衆に連絡をとったので、三千の衆徒は「悉ク甲冑ヲ帶シテ馳參」り、「官軍ノ兵粮トテ、錢貨六萬貫・米穀七千石」を「波止土

Osaka Shoin Women's University Repository

濃ノ前ニ積」んだ。祐覚が、それらを配分したところ、「サテコソ未醫王山王モ、我君ヲ捨サセ給ハザリケリ」と「敗軍ノ士卒悉ク」が「憑モシキ事」に思ったのであった。

二

巻十四後半部の展開を見て来ると、「將軍」足利尊氏の動きに呼応して、西日本を中心に、あたかも噴出するかのように蜂起した「朝敵」の動きが、否定的ではなく描かれている事がわかる。

たとえば、第七章の大渡合戦に於て、官軍側の挑発に乗せられ渡河しようと焦る武蔵・相模の武士達は、高師直の制止に従ったことで、「二千餘騎」ではなく「五百餘人」の犠牲で済んだ。

又、「參河・遠江・美濃・尾張ノハヤリ雄ノ兵共千餘人」は、橋桁が折れて水中に落下するが、この場面も『平家物語』・『源平盛衰記』の「筒井淨妙・矢切但馬」と比較される形で描かれている「野木與一兵衛入道頼玄」の、奮戦及びたった一人の帰還との対比として描かれているため、むしろ頼玄の方を英雄的に形象する結果となっている。(注3)

山崎合戦に於ては、「元弘ノ佳例ニ任セテ」赤松範資がまず「矢合ヲスベシト、兼テ定メラレ」ていたのに「播磨ノ紀氏ノ者共」が「三百餘騎抜懸シテ一番ニ押寄セ」たものの、官軍側の五百余騎に攻められ「一積モタマラズ追立ラレテ、四方ニ逃散」った。

ただ、この場面も、規律違反の紀氏（浦上氏）一族は、巻三の高橋・小早河のように、嘲笑の対象とされるわけではなく、二番手の「坂東・坂西ノ兵共二千餘騎」と「城中ノ大將脇屋右衛門佐義助ノ兵、幷宇都宮美濃將監泰藤ガ紀清兩黨二千餘騎」との互角の攻防の後の、細川・赤松の大軍の攻撃によって、官軍が「叶ハジトヤ思ヒケン、引返シテ城ノ中ニ引籠」った、と描く漸層的叙法の第一段階として描かれている、と見ることができる。

第九章の「四國・西國ノ兵共」の放火による内裏炎上について、「越王呉ヲ亡シテ姑蘇城一片ノ煙トナリ、項羽秦ヲ傾テ、咸陽宮三月ノ火ヲ盛ニセシ、呉越・秦楚ノ古モ、是ニハヨモ過ジト、淺猿カリシ世間ナリ」と記されるのが、いささかの批判を含む慨嘆である。

なお、長年が帰京したとの記述の後に「今日ハ惡日トテ將軍未都ヘハ入給ハザリケレ共、四國・西國の兵共、數萬騎打入テ、京白川ニ充滿タレバ」とあり、「將軍」と「四國・西國ノ兵共」とを区別し、内裏炎上の罪が「將軍」にはないことを暗示している。

一方、朝廷側について見ると、先にも触れたように、第六章の狂歌の「賢王ノ横言」、第七章の落書の「タラサセ給フ綸言」という語句が内包する批判の矢は、明らかに後醍醐天皇に向けられたものである。

又、第六章における勅使の「龍馬」が急死する記述は、忠諫の臣・万里小路藤房に遁世を決意させた巻十三第一章・第二章を想起させるものである。

更に、第八章で「心閑ニ」行動した吉田定房にさえも「見落シ」があった事を「淺猿シケレ」と記した後の「此二三年ノ間天下僅ニ

Osaka Shoin Women's University Repository

一統ニシテ、朝恩ニ誇リシ月卿雲客、指タル事モナキニ、武具ヲ嗜ミ弓馬ヲ好ミテ、朝義道ニ違ヒ、禮法則ニ背シモ、早カヽル不思議出來ルベキ前表也ト、今コソ思ヒ知ラレタレ」という一文は、京都側の公家達に対する因果論的な批判であり、新田義貞達が供奉しての都落ちについての「事ノ騒シカリシ有様タヾ安祿山ガ潼關ノ軍ニ、官軍忽ニ打負テ、玄宗皇帝自ラ蜀ノ國ヘ落サセ給シニ、六軍翠花ニ隨テ、劔閣ノ雲ニ迷シニ異ナラズ」の一文にも、冷やかな視線が含まれている。

勿論、朝廷側にも、義を重んじて自害した勅使川原父子、内裏の荒廃を見て落涙する名和長年、[注4]尊氏の命を狙ったものの果たせずに討死した結城親光など、存在感を見せる個人の動きもあり、巻末に描かれる山門大衆の協力的姿勢は帝を安堵させるものではある。

しかし、官軍側には降人が目立つのに対して、「將軍」側は、第十章の末尾に西源院本のみが載せている[注5]「將軍ノ運ノ程コソツヨカリケルト覺タリ」との一文に象徴されるように、「運」さえもが尊氏に味方している。

諸国で蜂起した武士達は、「朝敵」という用語で記述されているものの、「將軍の御教書」[注6]をこそ重く考えて挙兵したと見ることができる。

前半部では、新田義貞と足利尊氏とが対決する形で描かれていた巻十四であったが、尊氏が「朝敵」側となる後半部に至って（もっとも、諸国で挙兵した武士達に対しては「朝敵」の語が付けられてはいても、尊氏個人を「朝敵」と呼ぶわけではない）、尊氏は、後醍醐天皇と対峙する存在としては「朝敵」でありつつも、むしろ、「將軍」という用語こそが、建武三年正月の時点における足利尊氏を立体感ある存在として描く――そのように形象しているのが巻十四後半部であると見ることができよう。

現に、第十章の「將軍」入洛の記述に続けて「兼テハ合戰事故ナクシテ入洛セバ、持明院殿ノ御方ノ院・宮々ノ御中ニ一人御位ニ卽奉テ、天下ノ政道ヲバ武家ヨリ計ヒ申ベシト、議定セラレタリケルガ、持明院ノ法皇・儲王・儲君一人モ殘ラセ給ハズ、皆山門ヘ御幸成タリケル間、將軍自ラ萬機ノ政ヲシ給ハン事モ叶フマジ、天下ノ事如何スベキト案ジ煩フテゾオハシケル」とあり、尊氏が「將軍」として「天下ノ事」に視線を向けていることも確認できる。

（注1）大森北義氏は『『太平記』は、鎌倉において有りうる筈のない直義らの〝謀計〟を設定した上、すでに発行されていた「綸旨」を〝偽もの〟で代置するなど、複雑な虚構をここでも仕組んでいるのである」（『「太平記」の構想と方法』・明治書院）と述べておられる。

（注2）引用は日本古典文学大系本（岩波書店）による。

（注3）『梅松論』（京大本による）でも、「野木ノ與一兵衛尉幷中莖ノ某兩人、一人當千ノ藝ヲアラハス間、將軍ヨリ直ニ各御コシ物ヲ給シ也」と記されている。

（注4）『梅松論（京大本）』には「今夜十日戌刻山門ヘ臨幸ナル。則内裏燒亡ス（中略）同時ニ卿相雲客以下、正成長年等ガ

Osaka Shoin Women's University Repository

宿所、片時ノ灰燼トナリシゾ情ナカリシ」とあり、長年にとっては自分の宿所の焼失への涙もあったかと考えられる。

（注5）西源院本（刀江書院）は、第十一章がなく、この第十章で巻十四が終わる。

（注6）『梅松論（京大本）』にも「四國中國ノ間ニ、兼日御教書ヲ給ル輩大勢ニテ攝津國河内邊ニ馳付ク」とある。